

## 一人称代名詞の使用実態と使用意識について —弘前の小学生の場合—

### The present condition and consciousness for using the first personal pronoun : Considerations in dialect on school children in Hirosaki.

郡 千寿子\*・成田 久美子

Chizuko KOHRI\*, Kumiko NARITA

#### 論文要旨

「私」に代表される一人称代名詞は、自分の息子を話相手にした場合は「お父さん」ということばに置き換えて使われ、孫を相手に今度は「おじいちゃん」と表現されたりする。日本語では、周囲の状況や相手によって、人称代名詞は多様であり、その時々で選択使用されているのである。

本稿では、弘前の小学生を対象として日常生活でどのような一人称代名詞を使用しているのかについての実態を調査し、言語習得過程にある小学生の言語使用および方言意識を考察した。学習指導要領（平成元年）では、小学校4年生の国語に「共通語と方言とは違いがあることを理解し、また、必要に応じて共通語で話すようにすること」とある。小学生における、男女別、学年別の調査結果は、今後、国語教育現場において、言語教育を考える際のひとつの手がかりに成り得ると思われる。

キーワード：一人称代名詞、津軽方言、共通語、わたし、ぼく、わ、

#### 1. はじめに

NHKの放送番組基準から方言意識の興味深い事実を紹介したい。1959年の基準には「放送のことばは、原則として、標準語による。必要により方言を用いるときは、慎重に取り扱う」（国内番組基準1-10-2）とあって、公共放送による、標準語普及と標準語重視の思想を見ることができる。これは簡単にいえば、方言軽視である。しかし、その36年後の1995年の放送番組基準においては、「放送のことばは、原則として、共通語によるものとし、必要により方言を用いる」（国内番組基準1-11-2）と改訂され、方言の必要性を認める意識が見られるようになるのである。

第19期国語審議会中間報告には、「方言の豊かな表現形式は残されるべきであり、文化のシンボルであるからその保存方法を検討してゆく。」とあって、近年は、方言軽視ではなく、方言の文化的側面を強調する方向に意識改革がなされているのである。

はじめて社会的集団のなかで生活し、またこと

ばを教育的に学んでゆく場である小学校という場所は、私たちが言語意識を獲得してゆく過程において非常に重要な役割をもっているといえよう。

自分の使用言語にプラスイメージをもつか、マイナスイメージをもつか、また、方言と共通語の言語相違をどのように意識するか、ということは、いうまでもなく周囲の環境や影響によるところが大きいであろう。言語形成期の小学生たちの言語実態を調査することによって、言語意識形成の一端を明らかにしたいと考えるのである。

#### 2. 弘前の言語事情

私たちは、いったいいつ頃、共通語や方言なる存在を意識し始めるのであろうか。また、いつ頃、使用する時と場所を選んで、言語を使い分けるといった社会的慣習を獲得するものなのであろうか。自分たちが育った地域特性や環境、そして教育など、様々な要因によって、その時期は違ってくるであろう。家族のもとで育てられた子どもたちにとって、日常の言語生活がすべてであり、彼らに

\* 弘前大学教育学部国語国文学科科教室

Department of Japanese Language and Literature, Faculty of Education, Hirosaki University

としては、そうした環境そのものが日本語の世界すべてである。

たとえば弘前は、津軽方言ということばが主流の社会<sup>3)</sup>であり、そうした言語環境のもとで子どもたちは生育する。もちろんそこには、家族から語りかけられることばを発端として、友人との会話やテレビから一方的に流れてくることばも存在するが、方言と共通語という言語の二重構造を最初から意識しているわけではないはずである。自分のことばをどのように感じているのか、またどのように意識するようになってゆくのであろうか。

そうしたことを探ることを目的として、ここでは、ひとつのことばを手がかりに考えてみたい。津軽方言のなかでも特徴的表現のひとつに一人称代名詞の「わ」がある。これは共通語では「私」に当たることばであるが、時と場合によっては、「うち」であり「ぼく」であり「おれ」ということばと同様である。こうした一人称代名詞の実際の使用について、特に小学生の使用実態について、学年別また男女別に調査することによって、ことばの使用とことばに対する意識がどのように変化しているのか、またしていないのか、について検討してみたいと思うのである。

『現代日本方言大辞典』<sup>2)</sup>から、津軽方言の中の「一人称代名詞（自分を指す自称代名詞）」を紹介しておく。

ワ [wa] 【吾】俺、私。男女とも。

オラ [ora] 【俺】俺、私。劣勢。主に男性。

オレ [ore] 【俺】俺、私。劣勢。主に男性。

ワシ [was i] 【儂】私。ワより上品。

主に男性が使用。劣勢。

ワレ [ware] 【吾】私。大正のころ年配の男性がよく使っていた。なかには終戦のころまで使っていた人もある。ワよりは上品だった。

テメエ [t eme] 【手前】自分を謙遜した言い方。やや品位に欠けるが、悪い言葉ではない。戦前から使用の続く語形で、現在は勤めに出ている男性などが使う。劣勢。

ワダシ [wada s i] 戦後、女性を中心に使われるようになった上品で丁寧な言い方。普通、目上に対して用いる。

本稿では、一人称代名詞のなかでも、特に「わ」を中心として取り上げて考えてみたい。これは津軽方言<sup>3)</sup>の代表的言語のひとつでもあり、男女限らず用いられることばである。『日本方言大辞典』<sup>4)</sup>では「わ」に「我」、『現代日本語方言辞典』では「わ」に「吾」という漢字が当てられている。方言は当然、口語表現に顕著に見られる現象であるので、漢字はまさしく当てられている、のであり、ひとつの解釈の現れでもあるが、ここでは使用実態に焦点を絞って考えてゆきたい。

現在のように、共通語が浸透した社会においては、場面と状況によって、方言と共通語を使い分けているのが一般的と推測されるが、実際の使用状況については必ずしも明らかにはされていないのである。

### 3、小学生の現状

弘前市内の小学生（各学年約50名）を対象にアンケート調査を行ない、自分のことをどのように表現しているのかについて調査した。方言という意識を持っているのか、時と場合によって、共通語と方言を使い分けているのか、を調査目的としたアンケートである。男女別、学年別にその調査結果を以下にまとめていきたい。

#### I 「わ」の使用状況について

##### 3-I-1 「わ」ということばを知っているか？

方言としての一人称代名詞「わ」ということばを知っているかどうか、の調査項目結果を学年別男女別に%表示をグラフ化したものが【図1】【図2】である。ほとんどの小学生が、自分のことを指すことばとしての方言「わ」を認識している状況が知られる。また学年が上がるにつれ、その認識率も上がっている。

男女別では、一般的に男子の方が女子より認識率が高いことも指摘できるが、これはのちの使用率にもかかわってくる現象である。こうした認識率の結果は、弘前市内在住の小学生のなかで、方言である一人称代名詞の「わ」が深く浸透していることばであることを物語っているものといえよう。

##### 3-I-2 自分のことを「わ」というか？

次に実際に自分のことを方言の「わ」を使って表現するかどうか、の調査項目結果を学年別男女別に%表示をグラフ化したものが【図3】【図4】である。

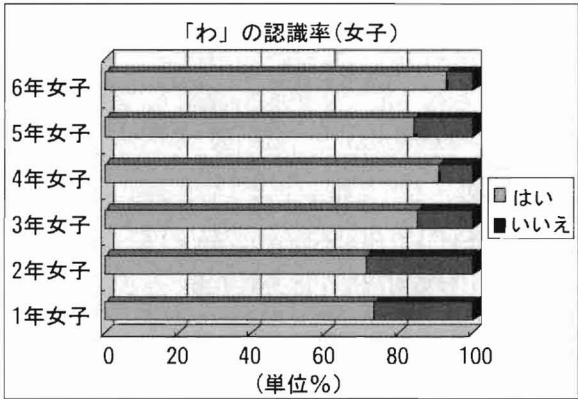
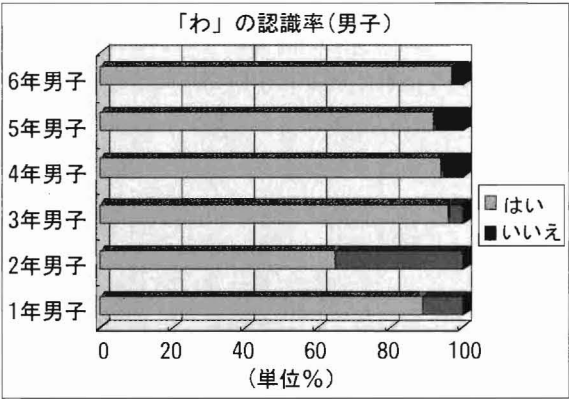
I-1 自分のことを「わ」ということを知っているか。

【図1】 (単位 %)

	はい	いいえ
1年男子	89	11
2年男子	65	35
3年男子	96	4
4年男子	94	6
5年男子	92	8
6年男子	97	3

【図2】 (単位 %)

	はい	いいえ
1年女子	73	27
2年女子	71	29
3年女子	85	15
4年女子	91	9
5年女子	84	16
6年女子	93	7



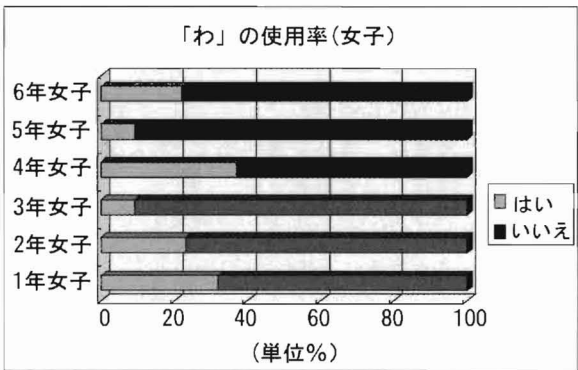
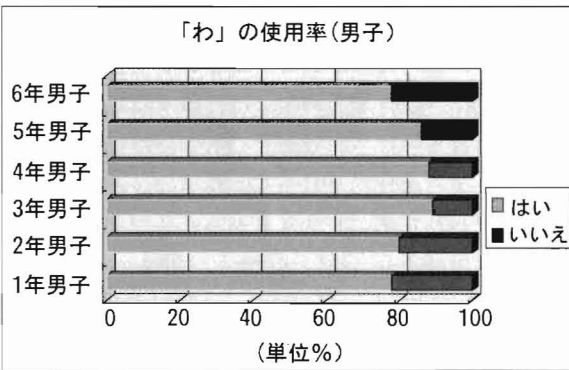
I-2 自分のことを「わ」というか。

【図3】 (単位 %)

	はい	いいえ
1年男子	78	22
2年男子	80	20
3年男子	89	11
4年男子	88	12
5年男子	86	14
6年男子	78	22

【図4】 (単位 %)

	はい	いいえ
1年女子	32	68
2年女子	23	77
3年女子	9	91
4年女子	37	63
5年女子	9	91
6年女子	22	78



興味深いのは、男女でかなりの差がでたことと学年別の格差である。男子の低学年で使用率が低いのは、実際に「わ」という方言を知らない児童がいることとの関わりと思われる。一方、高学年で使用率が低いのは、「わ」ということばが方言であることを知っているが故の使用率の低さなのではないだろうか。つまり、方言というものの位置づけを自分なりに意識し、その使用について自己決定できる年齢であることを示していると思われる。

女子の方で注目されるのは、3年生、4年生、5年生における認知率と使用率の相関性である。3年生5年生は認知率と使用率がほぼ同じ関係にある。知っていることばであるが、自分は使用しない、という女子が多い。一方、その中間の年齢である4年生は、認知率も高く、また使用率も3、5年生に比してかなり高い。これは、ことばそのものの認知率は学年に応じて高くなる傾向にあるが、知っているということと、使用することとは必ずしも連動しないということである。使うか使わないかの決定要因のひとつは、それぞれの言語環境——周囲、特に友人が使うか、使わないか——に影響されている可能性が高いことを表しているのではないかとと思われる。

## II 状況・相手による使用実態

次に、どういう場面状況において、また相手によって自分のことを表現しているのか、という実態について考えてみたい。一般的に社会的慣習として、公的な場面と私的な場面において、使用言語を選択するということが行われるが、小学生の言語実態については明らかではなかった。できるだけ、具体的な場面想定ができるよう、以下のように①～⑧の場面設定を設けた。低学年児童にも理解しやすいようにアンケート用紙は設問項目のほかに絵で図示して回答を求めた。

- ①おうちで家族といるとき
- ②家族とお店でごはんを食べるとき
- ③友達と電話で話すとき
- ④電話をして友達のお母さんがでたとき
- ⑤友達と遊ぶとき
- ⑥町で先生と会ったとき
- ⑦学級会で話し合うとき
- ⑧授業中、先生にあてられたとき

以上の質問項目からは、児童が、「家族」「友人」「友人の母親」「先生」といった話相手の存

在をどうとらえているか、また場面の私的公的といった性格についてどう意識しているか、を探るうえにも有効であると思われる。自分のことを何と表現するかについて「わ・ぼく・わたし・あたし・おれ・おら・うち・自分の名前・そのほか（）」の9種のことばからそれぞれの場面設定に応じて回答してもらった。調査結果を学年別および男女別に表示し、また必要に応じてグラフ化したものが【図5】～【図13】である。

### 3-Ⅱ-1 「わ」の使用について

女子より男子の方が使用している割合が高いので、ここでは特に男子児童の場面による使用割合の相違に注目して考えてみたい。

【図5】に見られるように、男子では、①③⑤の場面で「わ」の使用割合が多くなっている。使用対象は「家族」と「友人」である。相手が自分にとって、近しい関係であれば「わ」の使用割合が高いという結果を示しているといえよう。

どの学年を通じても「わ」の使用が低かったのが、④の「友人の母親」相手の会話においてである。私的か公的か、という関係性でいえば、本来は「先生」も目上の人であり、公的な相手であるはずだが、⑥や⑧の「先生」相手の場合で、必ずしも使用率が学年全体を通じて低いわけではない。

つまり、児童にとっては「先生」は、むしろ「友人の母親」よりは親密度が高い相手と考えられているといえよう。また、「先生」に対しても、学校を離れた「町」という場所設定の⑥では、学年を通じて「わ」の使用率が高い。低学年や中学年ではあまり相違が感じられないが、高学年の⑥と⑧の使用を比較してみると、明らかに場面についても意識して使い分けをしている児童が多いことが知られる。

一方で、授業中の⑦や⑧の使用状況については、本来は、クラスでの話し合いという場面の⑦と、先生に指された場面の⑧では、状況設定つまり話相手が違うわけであり、⑧の方が使用割合が低くなると予想される。しかし、結果的には、学年によってかなり差があることがわかる。これは、児童の使用意識は、状況設定や場面における判断だけでなく、そのクラス全体の雰囲気にもかなり影響を受けていることを示しているのではないだろうか。

このグラフと対照的な結果を示したものが、【図6】の「ぼく」という表現である。

## Ⅱ 状況・相手についての使い分け

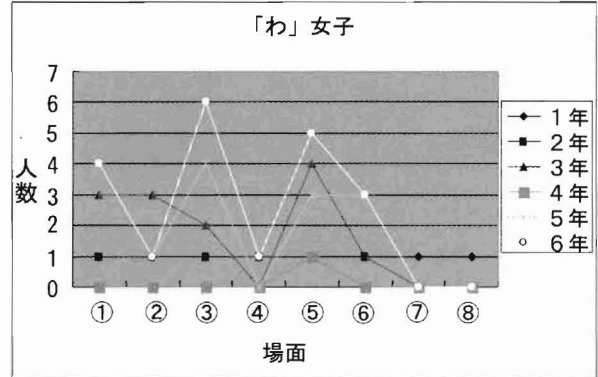
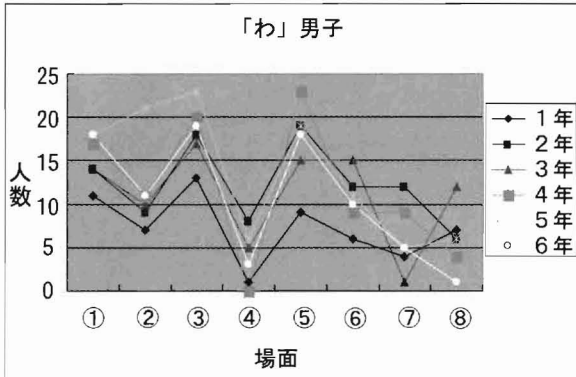
【図5】

「わ」男子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	11	7	13	1	9	6	4	7
2年男子	14	9	18	8	19	12	12	6
3年男子	14	10	17	5	15	15	1	12
4年男子	17	11	20	0	23	9	9	4
5年男子	18	21	23	6	19	11	5	6
6年男子	18	11	19	3	18	10	5	1

「わ」女子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	1	1	1	1	1	1	1	1
2年女子	1	1	1	1	1	1	0	0
3年女子	3	3	2	0	4	1	0	0
4年女子	0	0	0	0	1	0	0	0
5年女子	4	1	4	0	3	3	0	0
6年女子	4	1	6	1	5	3	0	0



【図6】

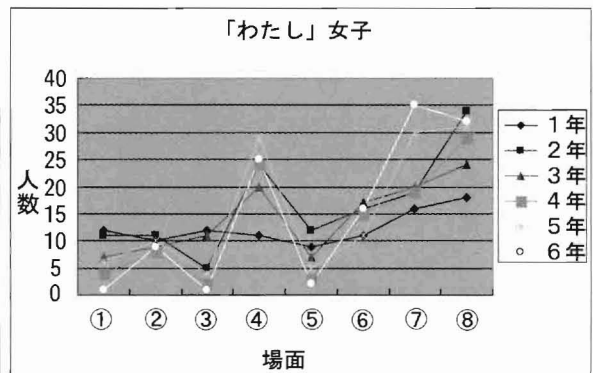
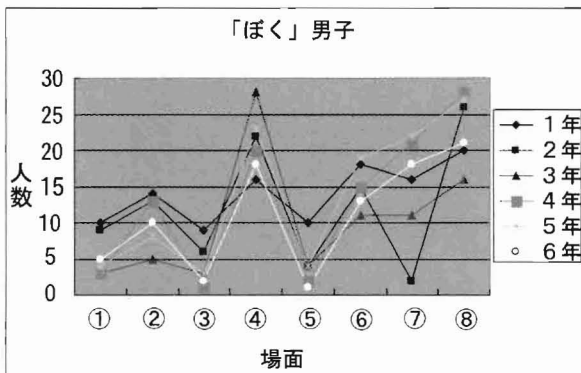
「ぼく」男子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	10	14	9	16	10	18	16	20
2年男子	9	13	6	22	4	15	2	26
3年男子	3	5	3	28	4	11	11	16
4年男子	3	13	1	20	2	15	21	28
5年男子	4	8	3	23	4	19	22	27
6年男子	5	10	2	18	1	13	18	21

【図7】

「わたし」女子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	12	10	12	11	9	11	16	18
2年女子	11	11	5	24	12	16	19	34
3年女子	7	9	11	20	7	17	20	24
4年女子	4	8	2	24	3	15	19	29
5年女子	6	10	4	29	5	11	30	31
6年女子	1	9	1	25	2	16	35	32



「ぼく」女子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
2年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
3年女子	1	0	1	0	1	0	0	1
4年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
5年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
6年女子	0	0	0	0	0	0	0	0

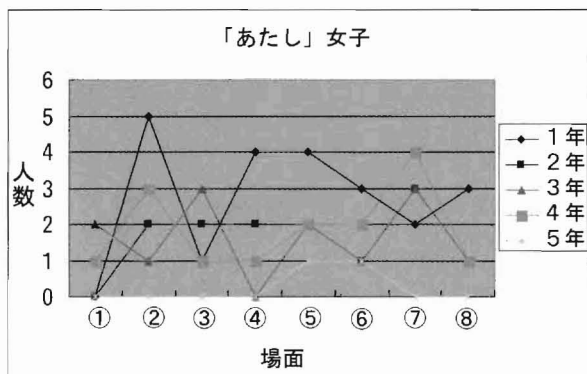
「わたし」男子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
2年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
3年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
4年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
5年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
6年男子	0	0	0	1	0	0	0	0

【図8】

「あたし」女子

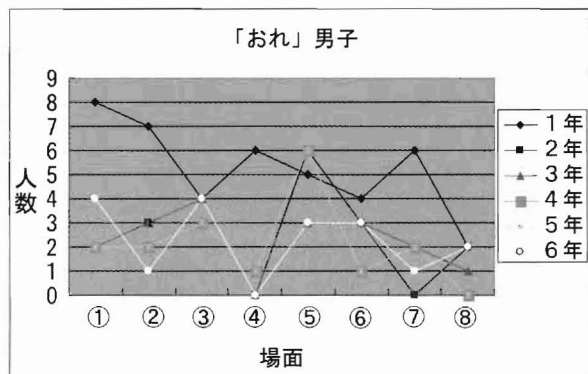
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	0	5	1	4	4	3	2	3
2年女子	0	2	2	2	2	1	3	1
3年女子	2	1	3	0	2	1	3	1
4年女子	1	3	1	1	2	2	4	1
5年女子	0	0	0	0	1	1	0	0
6年女子	0	1	0	0	0	0	0	0



【図9】

「おれ」男子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	8	7	4	6	5	4	6	2
2年男子	2	3	4	0	6	3	0	2
3年男子	2	3	4	0	3	3	2	1
4年男子	2	2	3	1	6	1	2	0
5年男子	2	2	3	1	6	1	2	0
6年男子	4	1	4	0	3	3	1	2



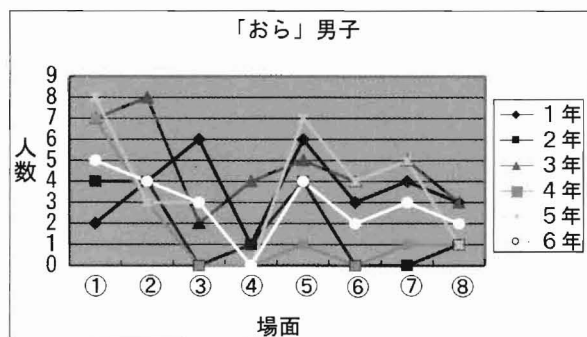
「おれ」女子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
2年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
3年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
4年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
5年女子	0	0	1	0	0	0	0	0
6年女子	1	0	0	0	0	0	0	0

【図10】

「おら」男子

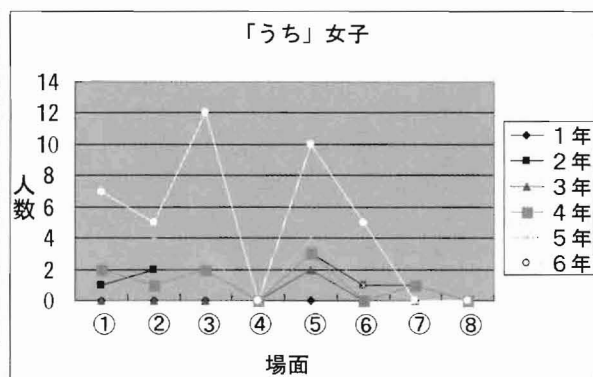
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	2	4	6	1	6	3	4	3
2年男子	4	4	0	1	4	0	0	1
3年男子	7	8	2	4	5	4	5	3
4年男子	7	3	0	0	1	0	1	1
5年男子	8	3	3	0	7	4	5	1
6年男子	5	4	3	0	4	2	3	2



【図11】

「うち」女子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
2年女子	1	2	2	0	3	1	1	0
3年女子	0	0	0	0	2	0	0	0
4年女子	2	1	2	0	3	0	1	0
5年女子	3	4	3	0	4	1	0	0
6年女子	7	5	12	0	10	5	0	0



「おら」女子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
2年女子	2	1	0	0	2	1	0	0
3年女子	0	0	0	0	0	0	0	0
4年女子	1	0	0	0	1	0	0	0
5年女子	1	1	1	0	1	1	0	0
6年女子	0	0	0	0	0	0	0	0

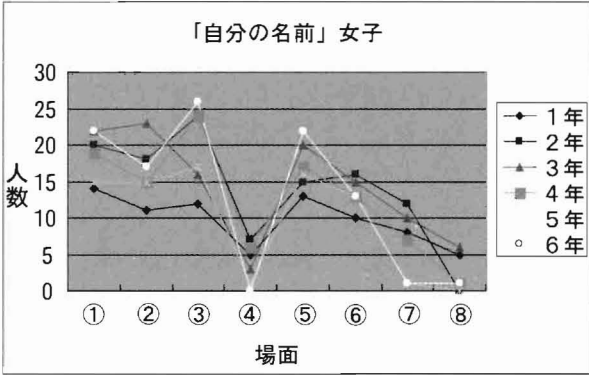
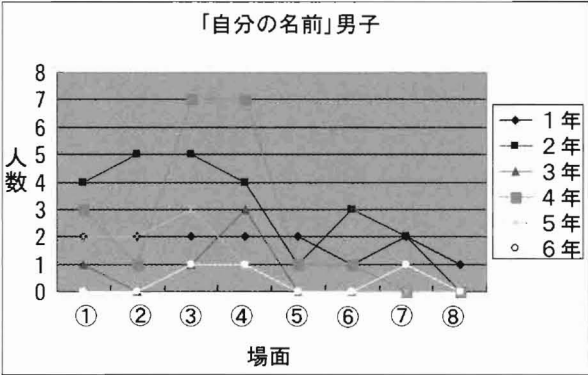
「うち」男子

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	2	1	1	0	1	1	2	0
2年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
3年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
4年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
5年男子	0	0	0	0	0	0	0	0
6年男子	0	0	0	0	0	0	0	0

【図12】

「自分の名前」 男子								
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	2	2	2	2	2	1	2	1
2年男子	4	5	5	4	1	3	2	0
3年男子	1	0	1	3	0	0	0	0
4年男子	3	1	7	7	1	1	0	0
5年男子	2	2	3	1	0	0	0	0
6年男子	0	0	1	1	0	0	1	0

「自分の名前」 女子								
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	14	11	12	5	13	10	8	5
2年女子	20	18	24	7	15	16	12	0
3年女子	22	23	16	3	20	15	10	6
4年女子	19	15	24	6	17	13	7	1
5年女子	15	15	17	1	16	13	1	0
6年女子	22	17	26	0	22	13	1	1



【図13】

「その他」 男子								
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年男子	0	0	0	9	1	0	0	0
2年男子	1	0	0	1	1	1	0	0
3年男子	0	1	0	1	0	1	0	0
4年男子	1	2	2	1	1	0	0	0
5年男子	1	3	4	0	0	0	0	1
6年男子	0	8	3	10	3	4	4	6

「その他」 女子								
	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧
1年女子	1	1	2	7	1	3	1	1
2年女子	0	0	1	1	0	0	0	0
3年女子	1	0	1	10	1	0	0	0
4年女子	1	1	0	0	1	0	0	0
5年女子	2	0	0	0	0	0	0	0
6年女子	6	6	0	14	6	4	5	6

3-Ⅱ-2 「ぼく」の使用について

【図5】【図6】のグラフの状況が、全く反比例している様子を知ることができる。「わ」の使用が全体を通じて圧倒的に低かった④の「友人の母親」相手には、「ぼく」という表現を使用している児童がかなり多い。①②の「家族」③⑤の「友人」という、親密度の高いと思われる相手に対しては「ぼく」の使用は少ないが、④⑥⑦⑧という比較的公的な場面では「ぼく」の使用が高くなり、高学年では、こうした使い分けの様子が顕著に見られるようになる。

学級会で話し合う場面⑦では、2年生以外は比較的「ぼく」の使用が多い。ここで【図5】の「わ」の使用と比較してみると、興味深いことがわかる。この2年生は、⑦の場面で「ぼく」の使用率は学年別の中で一番低いが、「わ」の使用率が学年別の中で一番高い。児童の判断基準のひとつは、場面や相手、という大人が使い分けの時に判断する基準以外に、周囲がどうしたことばを

使っているかかなりの部分で影響を受けていることが予想される。この場合はクラスの雰囲気も作用しているであろう。

以上の結果から、基本的には、児童の意識のなかでも、「わ」が私的で親しい関係性において使用されるべきことばであり、その対極に位置するものとして、公的な「ぼく」という自称代名詞の存在を位置づけているらしいことは、グラフの対照からも明らかと思われる。

3-Ⅱ-3 「おら」の使用について

「わ」「ぼく」の他、男子児童の一人称代名詞で興味深いのが【図10】の「おら」である。女子児童の中でも少数ではあるが使用の様子が見られる。家族①②や友人③⑤に対しての使用が多いようであるが、学年別に差があるわけでもなく、先生相手の⑥⑧や学級会⑦でも使用が見られ、かなりのばらつきがある。個人的な使用差であると考えた方がよいのかもしれない。



しかし、この個人的な使用差というのは、周囲の使用者に影響された、という環境、つまり地域的な方言環境というだけでなく、別の刺激的な要素があるかもしれない。たとえば、【図9】の「おれ」の場合は、テレビの人気アニメの『クレヨンしんちゃん』からの影響があるとも考えられるであろう。主人公のしんちゃんは、自分のことを「おれ」と呼び、乱暴な言葉使いをするという設定である。こうしたテレビから触発されて、児童が興味本位に使用している可能性も否定できないであろう。個人的な環境には、家族などからの影響関係だけでなく、こうした周囲からの言語刺激の存在も大きく作用していると思われる。

### 3-II-4 女子児童の一人称代名詞について

女子児童の一人称代名詞で最も多いのは、【図12】に見られるように「自分の名前」である。男子の「わ」「ぼく」のように対照的な存在として考えられるのは、女子児童の場合は、「自分の名前」と「わたし」の関係ということになるであろう。【図7】と【図12】のグラフが対照的であることから明らかである。「友達の母親」の④では「自分の名前」を選択している児童は高学年では、【図12】のようにほとんどいないが、反対に「わたし」の使用割合は【図7】のように高学年になるほど高くなっている。私的な場面では「自分の名前」を使用する割合が高く、公的な場面では、「わたし」という代名詞を使っている児童が多いことを示している。

このほか、【図8】「あたし」、【図11】「うち」という自称代名詞も使われているが、全体の割合は高くなく、「わ」との大差もない。ただし、「わたし」と「自分の名前」以外でいえば、「うち」という代名詞を使っている女子児童が、特に高学年で目立っていることは指摘できるであろう。

## 4, おわりに

以上、弘前における小学生の一人称代名詞の使用実態について、グラフ化してまとめてみた。男女でその使用にかなりの差があること、また学年によっても差があることが明確に示せたと思われる。児童の使用実態からの調査結果を検討考察してみると、一般的に予想されるように、使用相手と使用場面だけからの判断基準によって使われているわけではないことが明らかとなった。

児童は、周囲の雰囲気や環境によって、大きな影響を受けながら、自らの言語形成を成し遂げていく。教育的に受ける価値判断とは別に、日常生活における言語環境の影響力はかなり大きいものであると思われ、この時期の言語教育の在り方については、もっと議論されるべきではないだろうか。

近年、方言が見直され、その文化的意義については感心も高まっている。しかし、方言の重要性や意義とは別の次元で、地域性に考慮した、それぞれの地域の実態に即した、より適切な言語教育の方向性を考えてゆく必要があるであろう。

弘前大学教育学部附属小学校・弘前市立高杉小学校・弘前市立城東小学校の先生方、児童の多くに本研究のためにご協力いただいた。最後となったが、記して深く感謝申し上げる。

### 参考文献

- 1) 佐藤和之・米田正人 『どうなる日本のことば』大修館書店、P36、1999年
- 2) 『現代日本語方言大辞典 第六巻』明治書院、P5504. 1993年
- 3) 鳴海助一 『津軽のことば 上下』続津軽のことば刊行会、1967年
- 4) 『日本方言大辞典 下巻』小学館、P2562、1989年

(2003.1.16受理)